

昭和四十年十一月一日修正印刷
 昭和四十年十一月四日修正發行
 昭和四十年十一月四日翻刻印刷
 昭和四十年十一月三十日翻刻發行

小學教科書 國語讀本卷九

臨時定價金拾貳錢

著作權所有

發行者兼

文部省

昭和四十年九月廿四日寄贈
 受入先 豊科町田沢 5880
 望月 伍
 重文国語習字学校

日二十月一十年四和昭

濟查檢省部文

翻刻發行
 兼印刷者

東京市小石川區久堅町百。八番地 20

日本書籍株式會社

代表者

大倉保五郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百。八番地

日本書籍株式會社工場

東京市麴町區飯田町二丁目三番地

株式會社 國定教科書共同販賣所

發賣所

康一店

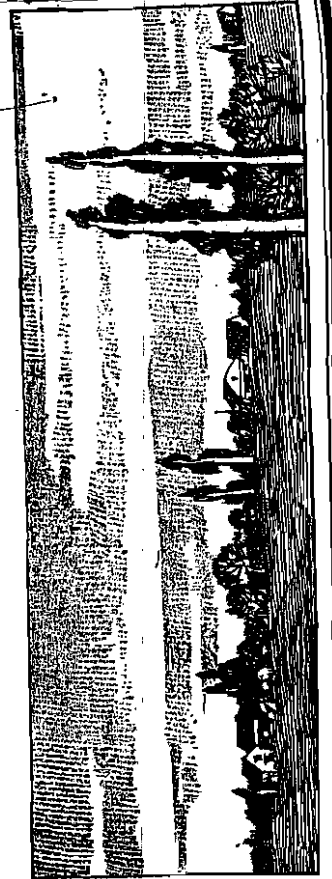
一人多

第一	今日	一	第十四	麥打	五十六
第二	トラク島便り	三	第十五	軍艦生活の朝	六十
第三	弟橘媛	九	第十六	東京から青森まで	六十七
第四	養雞	十一	第十七	いもぼり	七十七
第五	動物ノ色ト形	十五	第十八	石安工場	八十
第六	五代の苦心	二十一	第十九	星の話	八十四
第七	ナイヤガラ の 瀧	二十九	第二十	白馬岳	九十三
第八	若葉の山道	三十一	第二十一	初秋	九十九
第九	兩將軍の握手	三十六	第二十二	北風號	百二
第十	水師營の會見	三十九	第二十三	手紙	百十一
第十一	物ノ價	四十三	第二十四	水兵の母	百十四
第十二	弟から兄へ	四十六	第二十五	選挙ノ日	百十九
第十三	老社長	四十九			

第一 今日

ふけ行く夜のしつけさよ。
 あらゆるものはやみといふ
 黒きとばりにおほはれて、
 安き眠に入れるなり。

ひとり目ざむる古時計。
 夜をいましむる夜まはりの
 拍子木のごとがちくと
 さびしく時をききみ行く。



目 録

第一課	太陽	一	第十五課	人と火	六五
第二課	孔子	四	第十六課	無言の行	六八
第三課	上海	八	第十七課	松阪の一夜	七十一
第四課	遠足	十一	第十八課	貨幣	七十七
第五課	のぶ子さんの家	十四	第十九課	我は海の子	七十九
第六課	裁判	十八	第二十課	遠泳	八十三
第七課	賤獄の七本槍	二十三	第二十一課	暦の話	八十七
第八課	瀬戸内海	三十一	第二十二課	リンカーンの苦學	九十四
第九課	植林	三十五	第二十三課	南米より父の通信	百一
第十課	手紙	四十一	第二十四課	孔明	百十
第十一課	畫師の苦心	四十四	第二十五課	自治の精神	百十三
第十二課	ゴム	四十九	第二十六課	ウリントンと少年	百十七
第十三課	ふか	五十四	第二十七課	ガラス工場	百二十一
第十四課	北海道	五十九	第二十八課	鐵眼の一切經	百二十五

國十一

國十一

小學國語讀本卷十一

第一課 太陽

地球上に存在するもので、太陽の影響を受けぬものは一つもない。太陽の光と熱とがなくては、我々人間は勿論、あらゆる生物、一として生存することは出来ない。

これほど我々に重大な関係のある太陽とは、一體どんなものであらう。一口にいへば、白熱の状態にある一大火球で、之を形造つてゐるものは、液體に近い氣體であらうといふ。さうして其のさしわたしは三十五萬四千里、即ち地球の百九倍餘りに當り、其の容積は地球の百

第二課 太陽

覺

を覺した時はもう遅かつた。壁のすき間をもつた雨のため、本がすつかりぬれてゐたので、子供心にも大變心配して、其の晩はどうも眠れなかつた。翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、

「辨しやうすることが出来ませんから、其の代りに何か仕事をさせて下さい。」

と願つた。其の人は別にとがめもせず、願に任せて三日間、島の草をとらせ、きうして本は其のまゝ、リンカーンにやつた。リンカーンは其の本をていねいに乾かして、其の後何度もく讀返してゐるうちに、此の偉人の品

圖十一

圖十一

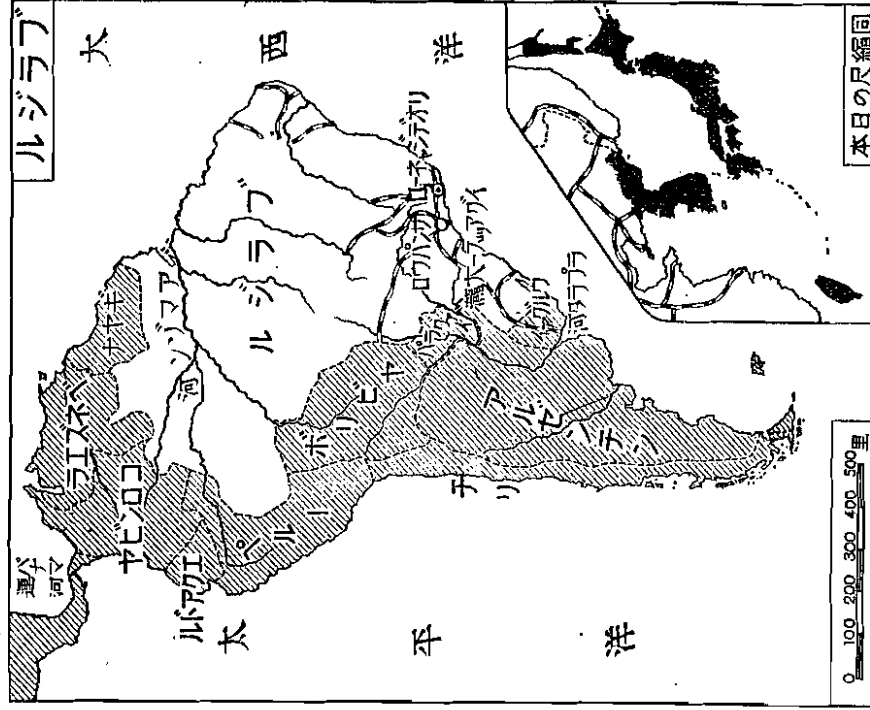
性に深く感化された。

リンカーンは父の手助をして忠實に働くと共に、非常な熱心と努力とをもつて勉強を續けた。彼が他日大統領となり、世界の偉人として萬人に仰がれるやうになつたのは、實に此の少年時代の苦心のたまものである。

第二十三課 南米より父の通信

一

御手紙拜見致候。二人ともよく勉強し居らるる由、安心致候。勉強も大切なれど、體にも精々御注意なさるべく候。



本日の尺縮同

目下
滞在中
リオデ
ジネー
ロ市は

ブラジル國の首府にて非常に景色よく港としても有名なる處に候。町のりつはなる事も文

國十一
國十一

劣

明諸國の大都會に比して少しも劣る所これなく候。此のブラジル國は廣さ我が國の十三倍もこれあり、其の大部分は熱帶に屬し居候へども、中央の高地や海岸地方の大半は割合に涼しく、殊に温帶に屬する南部の諸州にては、四季の變化も日本の如くはつきり致居候由、唯をかしきは日本の秋が春、日本の冬が夏といふ様に季節の相反する事に候。

二

此の手紙と一しよに繪葉書をたくさん小包

寫瀑



にて送り申候。其の中に有名なるアマゾン河や、イグアスーの大瀑布の壯觀を寫したるものもこれあり候。アマゾン河は全長五千五百キロメートル、世界の河の王といはれ居候。河幅は驚く程の廣さにて、河口の處

圖十一

豊略

舌

にては、三百二十キロメートルもこれある由、略東京豊橋間の距離に當り候。次にイグアスーの龍は、ブラジル國と隣のアルゼンチン國との境にある大瀑布にて、高さ五十五メートル、幅三千六百メートル、其の壯觀實に筆舌に盡くし難く候。

三

二週間ばかり前より西方のサンパウロ市に参り居候。此の邊は南米中、日本人の最も多く住める處にて、何處に行きても日本人を見が

在
甘
誘

け候は甚だ愉快に候。殊に日本人の小學校ありて、御前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては、殆ど身の南米に在るを忘れ候。世界に名高きブラジルコーヒーの主要なる産地も此の邊にて、甘蔗綿花米等もよく出来る由に候。昨日知人に誘はれてコーヒー園見物に出掛け候。大勢の人々が熟したるコーヒーの實を手にてこき落とし之を集めてみぞに投入れ候へば、まじりたる石砂などは沈み、實のみ浮びて流れ候を下流にてすくひ上げ、之

視

を廣きほし場にて乾かし候。之を機械にかけて皮を除き、袋に入れて外國に輸出する由に候。

コーヒー園には多くの日本人が働き居候。中にも十三四ばかりの子供が、各國人の間にまじりてかひなく立働ける様を見ては、如何にもけなげに存ぜられ候。

森林地開墾^四の様子を視察致居候ため、しばらく無沙汰に打過ぎ候。

牛

茂

ブラジルは何處へ参りても果なき原野と森林とに候。原野は大てい牧場にて、牛馬は放し飼にせられ居候。森林には大木すき間もなく

繁茂し

其の根

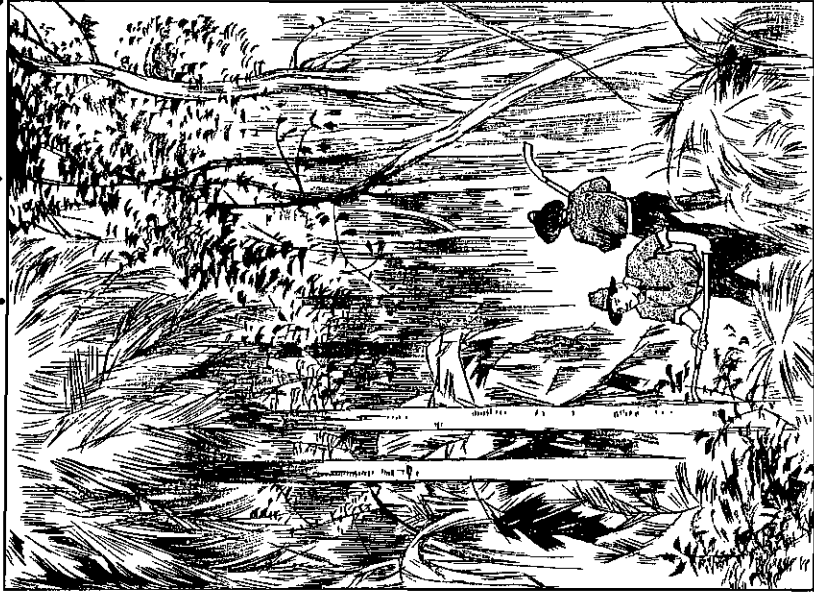
本には

つる草

灌木な

と思ふ

まゝに



十一

抱

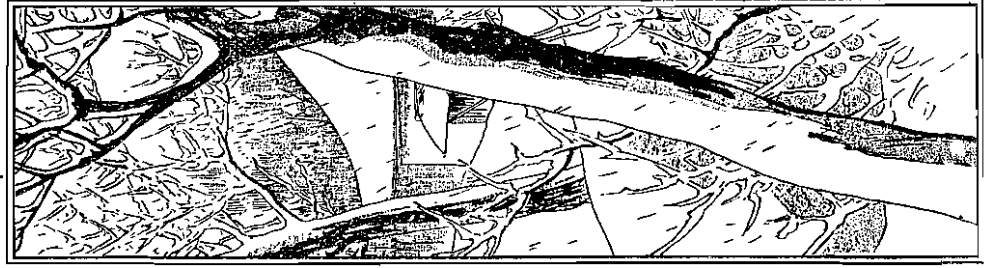
はびこり居候。かゝる處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、其の有様は如何にも男らしく勇ましきものに候。

先づ柄の長さ一間もあるなたにて灌木を伐拂ひ、次にをのを振るつて大木を伐るに、三抱も四抱もあるものが地ひきぎを打つて倒る様、壯快言語に絶し候。伐倒したる木は乾くまで其のまゝに致置き、さて四方より火を放てば、天をもこがすばかりのほのほをあげて、燃ゆる光景は、實にすさまじきものに候。燃え

あとは取片附けて畠とし、コーヒ―わたの木
などを植付け申候。

ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國
致すべく候。

第二十四課 孔明



白雲いらく去り又來る。

西窓一片残月あはし。

雲

窓

圖十一

圖十一

うき世をよそなるしづけき住まひ、

出ては日毎烟を打ち、

入りては机に書^ふをひもとく。

雪降りみだるゝ冬のあしたに、

風なほ冷たき春のゆふべに、

劉備^{りゅうへい}が三顧^{さんこ}のこよなき知遇^{ちぐう}

我が身をすてて報いんと、

起ちてぞ出てぬる草のいほりを。

顧

起

平成 5 年 11 月 16 日 寄贈

受入先	桐原義司
通	二 岡 聖 智 学 校

昭和六年五月三十日修正印刷
 昭和六年六月二日修正發行
 昭和六年六月二日翻刻印刷
 昭和六年六月二十日翻刻發行

著作權所有

著作兼
 發行

小學校國語讀本卷十三

定價金拾壹錢

文 部 省

日四月六年六和昭
 濟查檢省部文

翻刻發行
 兼印刷者

東京市小石川區久堅町百。八番地 26
 日本書籍株式會社

代表者 大 橋 光 吉

印刷所

東京市小石川區久堅町百。八番地
 日本書籍株式會社工場

發行所

日本書籍株式會社

目 録

第一課	明治天皇御製	一	第十五課	まぐろ網	七六
第二課	出雲大社	四	第十六課	鳴門	八〇
第三課	チャールズ・ダーウィン	九	第十七課	間宮林蔵	八二
第四課	新聞	十四	第十八課	法律	八六
第五課	蜜柑山	十九	第十九課	釋迦	九〇
第六課	商業	二三	第二十課	奈良	九四
第七課	鎌倉	二四	第二十一課	青の洞門	百三
第八課	ヨーロッパの旅	二八	第二十二課	トマス・エディソン	百一
第九課	月光の曲	三七	第二十三課	電氣の世の中	百五
第十課	我が國の木材	四一	第二十四課	舊師に呈す	百九
第十一課	十和田湖	四九	第二十五課	港入	百十二
第十二課	小さなねぢ	五二	第二十六課	勝安芳と西郷隆盛	百十四
第十三課	國旗	六〇	第二十七課	我が國民性の長所短所	百十二
第十四課	リヤ王物語	六五			

國十二
國十二

小學常國語讀本卷十二

第一課 明治天皇御製

古のふみ見るたびに思ふかな、

おのが治むる國はいかにと。

淺緑すみわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな。

大空にそびえて見ゆるたかねにも、

奇怪

は如何にもものすごい、いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生^{はふ}にをどるやう、最後は又急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、唯ぼうつとしてひき終つたのも氣附かぬくらゐ。

「さやうなら。」

ベートーベンは立つて出かけた。

「先生、又お出で下さりませうか。」

ちやうだいは口を揃へていつた。

「参りませう。」

揃

四十五

ベートーベンは、ちよつとふりがへつてめくらの娘を見た。

彼は急いで家に歸つた。さうして其の夜はまんじりともせず机に向つて、かの曲を譜に書きあげた。ベートーベンの「月光の曲」といつて、不朽の名聲を博したのは此の曲である。

第十課 我が國の木材

我が國に産する木材は其の種類頗る多し。今其の主要なるものを擧ぐれば、杉^{ひのき}檜^{ひのき}もみつがひは、松^か落葉松^{らまつ}けや、栗^かがしならくぬぎ等なり。

聲

植
柱
香澤
憂
耐

凡そこれ等の木材は、其の有する性質によりて各種の用に供すべく、随つて何れも重要ならざるはなけれど、中にも其の用途の廣きは杉及び檜なり。殊に杉は人爲によりて容易に増殖せらるゝ點において檜にまさり、其の需要の多きこと我が國の木材中第一位にあり。家屋、橋、梁、船、船電柱より桶たる曲物の類に至るまで、一として杉を用ひざるなし。然れども材の優良にして美麗なるは檜を以て第一とすべし。光澤と香氣とを有し、ねばり強くして、割れ、そる等の憂極めて少く、又よく濕氣に耐ふるが故に、建築材として最も重んぜらる。唯杉に

縮
柔
久
具

比して産額少く、増殖やゝ困難なるは惜しむべし。もみづがは共にそり又は伸び縮みすること著しきを以て、杉檜に比すれば用途甚だ狭し。されど何れも美しき光澤を有するが上にもみは柔かにして工作に便なれば、諸種の箱を作るに用ひられ、づがは堅くして久しきに耐ふるが故に、家屋の柱、土臺となすに宜し。ひば、松、落葉松は何れも堅くして、耐久、耐濕の性あるを以て、建築土木造船等其の用途頗る廣し。ひばは抵抗力を有し、松と落葉松とは彈力に富む等、各其の特性を具へたり。

新 烈 珍 磨

けやき、栗かしは何れも甚だ堅く、もくめこまやかなり。中にもけやきはもくめ美しく、磨けば美麗なる光澤を生じ、又くるひ少きが故に裝飾材として珍重せられ、栗は耐久耐濕の性殊に著しきを以て、家屋の土臺、鐵道のまくら木等の用に供せられ、かしは最も堅くして彈力に富むが故に、檣車運動器具の如き強烈なる力を受くるものを製作するに適せり。

かしは又ならずぬぎと共に薪炭材として重要なものなり。

杉は吉野杉、秋田杉を以て第一とし、檜は木曾産の聲譽

著

高く、近時臺灣阿里山の檜また有名なり。ひばは津輕半島に最も多く産す。松に至りては產地極めて廣くして、奥羽地方より九州に至るまで殆ど之を見ざる處なく、其の豊富なること我が國の木材中の首位を占む。中にも南部松、日向松は良材として最も世に著る。

第十一課 十和田湖

十和田湖は一部分秋田縣鹿角郡に屬し、其餘は青森縣上北郡に屬してゐる。此の邊は一帯に山地で、湖面は海面より四百メートルも高く、其の面積は約六十万キロメートルある。

を安んじ奉るべきことを聞

なり

平成

受入先	桐原義司
重文部図書館	学校

終

國十

昭和四年五月十一日修正印刷
 昭和四年五月十四日修正發行
 昭和四年五月十五日翻刻印刷
 昭和四年六月十日翻刻發行

小學國語讀本卷十

定價金拾壹錢

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

昭和四年五月廿二日

文部省檢査日

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百。八番地 25
 日本書籍株式會社

代表者

大 橋 光 吉

印刷所

東京市小石川區久堅町百。八番地
 日本書籍株式會社工場

發行所

日本書籍株式會社

目 次

第一	明治神宮参拜	一	第十五	輸出入	八十五
第二	アレクサンドル大王と醫師ブリヂ	七	第十六	登校の道	八十九
第三	道ぶしん	十一	第十七	言ひにくい言葉	九十一
第四	馬市見物	十六	第十八	文天祥	九十六
第五	燈臺寺の娘	二十四	第十九	温室の中	百
第六	霧	二十九	第二十	手紙	百六
第七	パナマ運河	三十	第二十一	日光山	百十
第八	開墾	三十七	第二十二	捕鯨船	百十二
第九	陶工柿右衛門	四十四	第二十三	太宰府まうて	百十六
第十	銀行	五十	第二十四	たしかな保證	百二十一
第十一	傳書鳩	五十三	第二十五	平和なる村	百二十四
第十二	鉢の水	五十九	第二十六	進水式	百二十七
第十三	京城の友から	七十二	第二十七	兒島高徳	百三十
第十四	炭坑	七十九			

國十

國十

第一 明治神宮参拜

十月十二日我等五年生一同は河井先生にみちびかれて、東京代々木の明治神宮に参拜せり。

青山の神宮前停留場にて電車を下り、廣き参道を行くこと十町ばかりにして神宮橋に達す。橋を渡り、大鳥居をくぐりて南参道に入る。兩がはに木立すき間もなく茂りて、新しき宮の境内とは思はれず。左に折れて第二の鳥居を過ぎ、又右に折れて第三の鳥居の前に出づ。水屋の水に手を清め口をす。参道に入れば、拜殿、廻廊など總べて白木

倉庫

を思ひ立ちしより十七年、即ち天和元年に至りて、一切經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられたり。これ世に鐵眼版と稱せらるゝものにして、一切經の廣く我が國に行はるゝは、實に此の時よりの事なりとす。此の版木は今も萬福寺に保存せられ、三棟百五十坪の倉庫に滿ちたり。福田行誠きよみちかつて鐵眼の事業を感歎していはく「鐵眼は一生に三度一切經を刊行せり」と。

小學常國語讀本卷十一 終

圖十一

昭和四年十一月五日修正印刷
昭和四年十一月七日修正發行
昭和四年十一月七日翻刻印刷
昭和四年十一月三十日翻刻發行

小學常國語讀本卷十一

定價金拾壹錢

著作權所有

發行者兼

文部省

昭和四年十一月二十日

文部省檢査濟

翻刻發行
兼印刷者

代表者

東京市小石川區久堅町百〇八番地 24

日本書籍株式會社

大橋光吉

東京市小石川區久堅町百〇八番地

日本書籍株式會社工場

印刷所

發行所

日本書籍株式會社

昭和四年三月 / 日
重文旧開智学校
名 子午博物館
請

重文旧開智学校

5